

第3種郵便物認可

一昨年に行われた田植え体験（生田緑地整備事務所提供）



生田緑地保全に尽力

ボランティア団体、国が表彰

生田緑地（川崎市多摩区桙形）内で環境保全活動に取り組んでいるボランティア団体「飛森谷戸の自然を守る会」が、国土交通省の「手づくり郷土賞（大賞部門）」を受賞した。都市部の自然を守ろうと地道に続けてきた活動が評価され、3日に生田緑地で同会に認定証が授与された。

(北川文)

同会は地域住民が中心となり、一〇〇〇六年に創立。昔ながらの自然を子どもたちに残そうと、古い地域名

である「飛森谷戸」を団体名に冠した。約30人のメンバーは、生田緑地内の初山地区のうち約2・7㌶で清掃や下草刈り、間伐などを定期的に行っているほか、緑地内の整備計画にも携わる。水田の管理や雑木林の間伐、ホタル育成にも力を入れており、これまでの会、屋外演奏会なども開いている。

手づくり郷土賞は、個性的で魅力ある地域づくりの優れた取り組みを対象にし、た国交相による表彰制度。同会は2001年度に同賞（地域活動部門）を受賞してお



生田緑地の初山地区で会の活動について説明する 高木事務局長（左） 三宮前区初山

で、同会の高木一弘事務局長(63)＝宮前区初山＝は、2月に矢澤茂会長が死去したことにつれ、「彼は生前、『ボランティア活動は楽しんでいいし加減が大事』と言っていた。彼の遺志を継ぎ、頑張りすぎず楽しみながら活動を発展させていきたい」と気持ちを新たにしていた。

サ
わざ
FE
民や
で開
区の

今日の音楽のまち・かわさき
毎週水曜日午後1:40ごろから5分程度放送
ナンピアンかわさきで14日、「か
さき区ビオラコンサート～JAZZ
STIVAL～」が開催される。区
や地域住民に気軽に音楽を楽しん
もらうため月1回、市役所ビー
開催。区制40周年を迎えた
の花にちなみ、現在の名称に変更

「奥の池」輝く湧水へ

生田緑地

川崎市多摩区の生田緑地「奥の池」で二十八日、水を抜き池底を掃除する「かいぼり」が始まった。管理された緑地内の池で、粗大ごみなどは出てこない。仮住まいに移すため次々救い出される小さな命に、見守る家族連れらは歓声を上げた。

(山本哲正)

奥の池は面積約八百四十平方㍍に湧き水がたまっている。新緑などを映して四季折々の表情を見せる、生田緑地で人気のスポット。近年アオコの発生などで汚れが目立ち、生物への影響を心配する声も出て、緑地にかかる市民団体や市などでつくる生田緑地マネジメント会議で、初めてかいぼりを決めた。

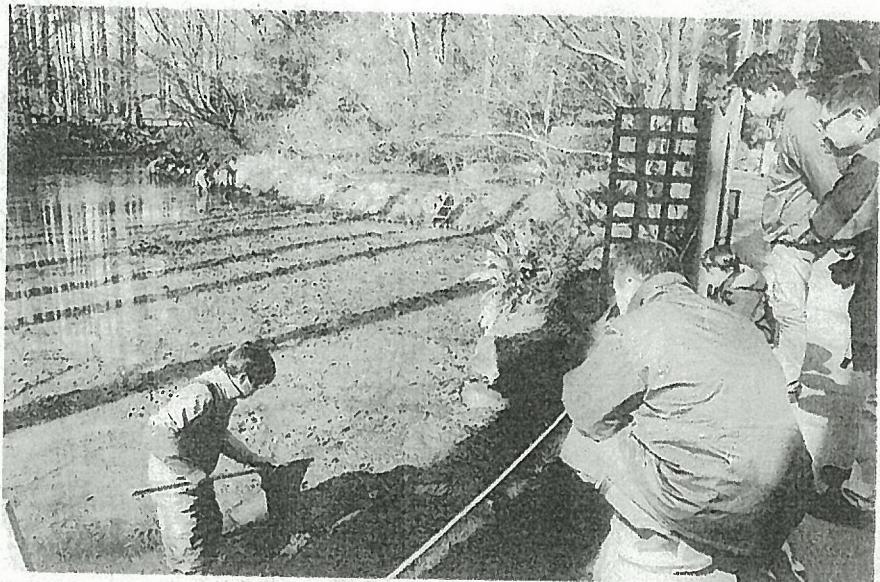
この日は、池にすむ絶滅危惧種ホトケドジョウを守護活動をする「生田緑地の谷戸とホトケドジョウを守る会」を中心に各団体スタッフ計二十五人が参加。水の栓を抜き、網などで生き物をすぐつた。

かいぼり開始

その数、スジエビ、ヌカエビ合わせて三千六百三十二匹、モツゴ二百五十九匹、メダカ百十一匹、アズマヒキガエル五四匹。外来種で処分されるアメリカザリガニは五百八十一匹見つかった。おそるおそる見ていた子どもたちも、一度ザリガニをつまみ上げると、驚いていた。



「最初は怖かったけれど、(ザリガニを)捕まえられるようになつたよ」と笑顔の子ども



お目当てのホトケドジョウはなかなか姿を見せなかつたが、底面が見え始めてから五匹が捕まつた。守る会の榎本亜矢事務局長は「産卵期前で生き物の数が減る冬場にしては多く見つかった。淡水の生き物は普段あまり注目されない。今日見てホトケドジョウを知った子たちもいる。やつて良かった」と語つた。

保護した生き物は、底をきれいにし自然に湧き水がたまるまで、緑地内の「かわさきゆと緑の科学館」で飼育する。

ホトケドジョウ5匹保護



この日保護されたホトケドジョウ

第27回神奈川地域社会事業賞、奨励賞の受賞団体と審査委員は次の通り。

〔本記1面に

【神奈川地域社会事業賞】
△民具製作技術保存会(県内)のほか、全国各地に伝わる民具の製作技術の普及・保存を目的に活動。わら細工、竹細工、はた織を中心、各地域の伝承技術保持者などから忠実に伝統技術を習得し継承している。民具の作り方の解説書や技術指導書を発行し、記録として残している(川崎市多摩区、中島安啓代表)。

△東北の子どもたちの学習支援「どどろき学習室・よこはま学習室」東日本大震災で避難生活をしている東北の

子どもたちを対象に、大学生のボランティアが学校授業の補習や受験対策などの学習支援を行っている。ピクニック援を行っている。ピクニックやクリスマス会などのイベントを実施し、思い出づくりや将来を語れる場所としての役

秀夫代表)。

△善行雑学大学(地元の有

スを実施。各地区の実情に合わせた実施回数で、地域住民との交流を深めている。2013年度の参加人数は年間延べ1288人(厚木市、渡辺代表)。

【奨励賞】△NPO法人四季の森里山研究会(横浜市緑区)と旭区にまたがる県立四季の森公園で里山・森林保全と自然環境保護に関する活動を

している。同公園がある近隣の小学校などと連携し、野外体験や自然観察などの環境教育事業も行っている。市外では秦野市渋沢丘陵の里山整備

志によって1990年3月に設立。第1回の講座から毎月開催し、今年15周年を迎えた。

△小鮎ボランティアの会(厚木市小鮎地区)で高齢者が孤立

講座内容に制約はなく、政治、芸能など多岐にわたり、講師

立しないよう地区内を12カ所に細分化し、食事会や演芸、謝

修会などのミニディサービス

が行われる。女性セントラル館長、三

田修(よこはまユース代表理

事)、並木裕之(神奈川新聞社社長)、林義亮(神奈川新聞

聞社統合編集局長)、鎌田良一(神奈川新聞厚生文化事業団専務理事)。敬称略

神奈川地域社会事業賞・奨励賞

割も果たしている(川崎市中原区、鈴木健大代表)。

△小鮎ボランティアの会(厚木市小鮎地区)で高齢者が孤

立しないよう地区内を12カ所

に細分化し、食事会や演芸、謝

修会などのミニディサービス

が行われる。女性セントラル館長、三

田修(よこはまユース代表理

事)、並木裕之(神奈川新聞

聞社統合編集局長)、鎌田良一(神奈川新聞厚生文化

事業団専務理事)。敬称略

2014.10.25 (土)

神奈川新聞

古民家の火守り続け 日本民家園「炉端の会」20年

園内ガイドや植栽整備担う

いろいろで火をたき、川崎市立日本民家園（多摩区）の古民家を温氣や虫害から守る活動を続けるボランティアグループ「炉端の会」が、設立から20年を迎えた。長年の功績が評価され、ことし市文化賞を受賞。貴重な文化財である古民家の魅力を日々伝えている。

ぱちぱちとまきが燃え、煙が天井まで立ち上る。ゆつたりと静かな時間が炉端に流れれる。

民家園には、主に江戸時代に全国各地で建てられた25棟の古民家が移築されている。休園日などを除いてほぼ毎日、3～4棟に交代で火をたくのは同会のメンバー約250人だ。

「わたしたちの方が古民家に癒やされてるんです」と同会の野田滋郎会長（73）。煙やすで家を乾燥させ、虫を防いで古民家を長持ちさせるための活動だが、いろいろの火をじっと見つめているのが好きというメンバーも多いという。

園内のガイドや古民家の

（北川 文）

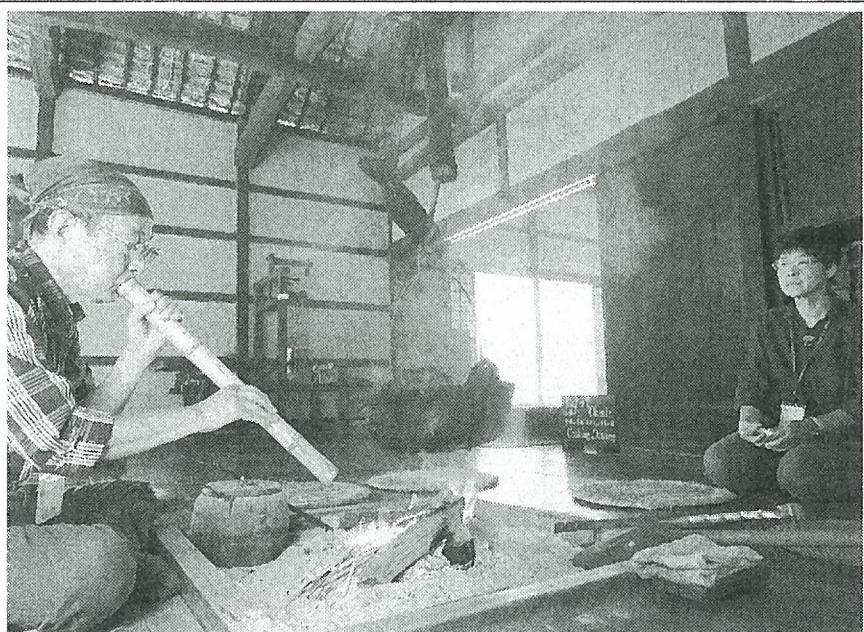
障子張り、各家の植栽の整備などの活動も行つており、民家園の運営に欠かせない存在。会員は40～80代と幅広く、川崎だけでなく藤沢や厚木、都内からも集まる。

横浜市磯子区から通う湯川加代子さん（55）は「長い年月をかけ、いろいろな人に住み継がれてきた重みがある」と古民家にほれ込む。来園者には、気候や風土によって異なる家の造りを説明するように心がけているという。地元の文化財を守る地道な歩みに市文化賞が贈られ、野田会長らは「これまでの活動が認められた」と喜ぶ。

28日には20周年を記念

し、いろいろのあるすべての古民家で火がたかれる（午前10時～午後2時半）。野田会長は「いろいろに火が入

ると不思議と生活感が出来る。数百年前の人々の暮らしに思いをはせてほしい」と来場を呼び掛けている。問い合わせは同園☎044（922）2181。



川崎市立日本民家園

情報スクランブル

イベント

◆ペーゴマ大会 28日午後1時半～2時半、日本民家園旧広瀬家の庭（多摩区）。同園主催。

「第三回民家園杯」と題し、ペーゴマ大会を開く。一般の部と小・中生の部に分かれ腕前を競う。午前10時半から初心者向けペーゴマ教室も。

大会は小学生以上60人、参加費100円（入園料別）。当日直接申し込む。ペーゴマの貸し出しもあり、持ち込み可（ルール内）。問い合わせは同園☎044（922）2181。

未申余川新月

2014.9.25(木)

川崎

58年ぶり幻の流星群

1956年に第1次南極観測隊が見つけ、幻の流星群と呼ばれる「ほうおう座流星群」が2日、大西洋のスペイン領カナリア諸島で58年ぶりに観測された。国立天文台などのチームが出現を予測し、当時隊員だった中村純一東大名誉教授(91)らと共に現地に出向き観測した。この流星群は56年12月、南極に向けインド洋を航行していた観測船「宗谷」で、甲板にいた中村さんや同僚が発見した。ピクターは1時間に300個ほどが流れ「流星雨」と呼べるほど規模だったが、翌年以降、現れたという報告例はない。

今回観測した国立天文台の渡部潤一副台長によると、1時間当たり数個の流星が現れ、流れの方向から、ほうおう座流星群の再来と判断した。チームによると、中村さんは

アーチー天文台などのチームが出現を予測し、当時隊員だった中村純一東大名誉教授(91)らと共に現地に出向き観測した。この流星群は56年12月、南極に向けインド洋を航行していた観測船「宗谷」で、甲板にいた中村さんや同僚が発見した。ピクターは1時間に300個ほどが流れ「流星雨」と呼べるほど規模だったが、翌年以降、現れたという報告例はない。



上58年ぶりにスペイン領カナリア諸島で観測されたほうおう座流星群の流星。左2日未明(下)ほうおう座流星群の観測に臨む、右から中村純一東大名誉教授、国立天文台の渡部潤一副台長、佐藤幹哉さん(11月30日、スペイン領カナリア諸島(ともに佐藤幹哉さん提供・共同)

川崎の佐藤さんら観測

ところが2003年に小惑星として発見された天体が、活動をほぼ終えたこの彗星だと近年判明。「かわさき宇宙と緑の科学館」の佐藤幹哉さん(47)が、軌道などから流星群の再来を計算した。

現地で観測した佐藤さんは「予想した時間に現れて、ほつとした」と話している。

この流星群の特徴であるゆっくりした流れを見て「なつかしい。(出現を予測した)計算は正しかったですね」と感想を述べた。

流星群は、彗星などがまき散らしたりを、地球が通過して

起きた。ほうおう座流星群の母天体は、1819年に発見された彗星と考えられていたが、この彗星は長らく見失わっていた。

この流星群の特徴であるゆっくりした流れを見て「なつかしい。(出現を予測した)計算は正しかったですね」と感想を述べた。

捉えた幻の流星群

58年ぶり「ほうおう座」観測

川崎で報告会

幻の流星群と呼ばれる「ほうおう座流星群」の観測に昨年、58年ぶりに成功した報告会が10日、「かわさき宙と緑の科学館」(川崎市青少年科学館、川崎市多摩区)で開かれた。観測した同科学館の天文担当職員、佐藤幹哉さん(47)は

「(流星のもととなる)母彗星が弱まり、数が少なかつたが、流星が観測できてよかったです」などと話した。

佐藤さんによると、同流星群は1956年12月、第1次南極観測隊の観測船上で初めて見つけた。この

ときは約1時間で300個ほどの流星が見られたといふが、それ以後は報告例がなかった。しかし、近年、流星群の母彗星とみられる小惑星が確認され、その結果、流星群の出現の計算や予測が可能になつたといふ。

佐藤さんは昨年12月、国立天文台のメンバーらとともに大西洋のスペイン領ナリア諸島へ遠征して同流星群を観測。そこで1時間当たり約十数個の流星の確認に成功した。

直前まで曇り空が続き、観測場所を2度も移動した

苦労もあつたというが、佐藤さんは「奇跡的に晴れ間が出て、見られた。今後、しっかりと精査して報告書をまとめたい」と話した。

(鈴木昌紹)



④ほうおう座流星群の観測について報告する佐藤さん=川崎市多摩区のかわさき宙と緑の科学館

⑤観測に成功した「ほうおう座流星群」の流星(佐藤さん撮影、提供)